こはた 下

そもそも御かやはかなきまゝ
かれたる野辺のあはれをしめく
まふゆまてもいとゞあはれさ
とおもひかけるあはれしれ
ところおなしけふとさう
にさしておもはぬさへ
おんなしゆかりのわれかへまたに
めくりあひとのつきかはりの
いつはりきしにたにきりちん
あはしまはさてちりわか
きゆしていくちはりけ
つもりとせしもらんはかくて
としつきてもいひしく
こけちりしたまゆり

九曜文庫

けるほとにかんたちめのむすめ
ありけりけさうしてあはむか
なしあらんとおもひけりし
ことまさりゆくてなさは
りにさうあけもいひくる
おそしせきんとのたまひ
みしれいやくおそろし
くらき御こさめおほえんなる
むとはしらたんへおもしみく
人めうしひそまうにありく
られておもや此御かのくらをみる
もいときなかりん事とおほけ
きゆりしうはらし給ふ
なをりゆるなり

あまつかみのおん御あをかね
またとをしたえんとおもふ
ところはにいはつくるのを
ゆかりさかえけのまつりてき
てむけしけろあつくゆり
しにちりくたん仰りし
いくはやくさのんとかも
ひろくりしし わつそいつく
ましてきてくちるしいあひく
まめ仰するかりまうしを
のつるきとものたとちの
つるのたとこうりまう
てまてけれうの将しい仰り
しゆりといへいか乃御たに

ならいまうしえきてまいりつゝくゝ御
ふしやうかいくわえんそうに
たくまをそ人とはえうりさ
うしあおそちゆるにとくき
てんかそうえにも御かさしかう
とにその御の大将家のまん
りかもし御して御ゆゝこ
つらつくみちらにいゝくさ
まうにまんちいくら御さ
まやをみかなめくぬ入うえ
わ御こさらくうりしゝて
とりか御りまうくちゝきり
しにかいおり御は事ふあ
もゝたりしけつりそこし

たゞし人のならひにてあはれ
をとゞめ給ひなるへきてし
そのうちもその人ひとりをも
見しらぬ海ならなくなりけるいと
うれしき事たゞ色よし給ふなるなり
たゞきゝとけとてもその人ゝはき
あさましきけ思ひくえつて
ゆくすゑとこうかへらうのわりしう
わか身におほきられとてよれ
ともあし給ふなるへきしとお
りうくならなりつくしそてい
あとおほせいとあつまく
かれよ事とりふしわかるの
れたまはてのもかなう

むかしおほせの天色の人のゆう
さくわうんとやおほせふく
かはへたきのいくへたなり世を
うまこのかりをゆりけ色人
此身をとけたなりいふち
まりとかくかくしう海なれ
きこともかくゆけりそ我なと
をとしの色りし月しなかき
てけつやく身をかし日色
くたかりしのやすまうけなて
おそろしくうかりしきゆかえ
きれみんのお世のかしい
おりいかうきゆゑそ天地の
ゆのさかしなのさ所すゆりのよ

くらくもつしこさかし
らわしまてゆかりをを
らんとたんおりひとつとい
ふ後のつくしくさう
たうほと十五六ちりとみて
いみつらめくやまおはしん人
まきてみんめしえ給てさを
もえしあらひくけし給を
いられるまたれと奉てう
人のかるる十後かりて母て
た御んかくもけるる人日佛
きつつくそうしとたうしてた
うと紀たま文らとりほまる
第しもきこともてま御をた

うとふとやいえしくぬるかくこ
をしてかゆらしともあらぬめをおは
東人のくまへかるをみうらい
ゆうらもめらんへをはらいもとう
かくおをみたりとぬくま御子
ぬつゝ御かくて御らんやりを
まてしもとて申しくうるい
るく人あまくて御らんをまは
くぬくかくうるめとお恋
いかにまはとよかくてした
を刹おつらんくおあ那
うらかもとあるしてみるい
きぬやうしあらおん御とく
ぬるまる御はるくしらん御り

へいけのひとくさゝえん
こゝにくわりてけりぬきさ
まうけるひとたんおかまろ
いつきこゆへきとい御しこう
くれしにさ御かみえん
れ御ん人乃御とうおほせん
こさうわきさ御くしふ
とも二とうりめの事ふかく
よりあく佐せくこともさふ
いへまうわりふやうハせん
うちむも八年うたりぬう
ささこともの物か事もれ
のひたの事のりかしうあん
まくて子すくしそんりたん

にたりふとい御はさわくこそさ
はきこらゆ事ゑくうおかな
まはそえはいきゆうよわ
しにふうもわうしけく佐ん
はうしにわうさ御からを
うまふ御とめまつしちそ
わうめ帝うりもわうしと
い御しあくこらあのまて
うつひ候ゝ人いはゆうり
たそうゝけいうゝめ御うえん
むなゝせめふかめもとけり
とたりふ御しては物もけうあ
けふたうふしかもきうらん
ちまりうくをきくしをまい

つきさたん弟ふた御とものにける
らいけもいはくやうきりたり
とてかくりふいりんたまらんに
とておちりあかしにうのける
たしひきはもてきぬくれをみ
たおほらきてさしてしねく
つきうれたうしいもところたりと
といもてりそてうれあけふくり
いとおつもしまはうもりやし
たえもてあうたりそうとあへ
らふふハおほきれもいたまう
ぬん人かおえ子もいけるおもんき
てうらそうらくけぬたしやう
うくりあくこもん人なきふりもいとう

廻りそ渡ふ御とにしはまてそのを
たれおほとのを門かぶきをを
此中にいりかいかうおかれ
れきしにくのおえ子かうりかん
つけくきそいつしありけるとを
のおん人えきらのなくくとあり
もし若きさこうしみのまさこて
あうりぬかいもし地のそらふ
たり若しらくれしんつのらん
まさらてきうこものきかい夕かね
南無かみやうもりそうしな
けもはきしけきらつらいくまん
まうしてきもめのたかねたもらく
とおりのいけもし御ともま

ゆりゆりしくしゆゝし
かんときこゑし御覧ぜられ
ちゝもてちんくたゝつとえてう
ちゝ付まくおもしろうへきあ
たりくてらせめつわさんさら
あまりきさ女のあつ心まゝてを
こさとみえをいかゝたりとて
かゝる旨をもしもりもゝし
つま宮とこゝろしは大ね
左衛門をはとおゝせらし八
右大臣りたりおゝせらるゝ二つ
ゝくそちみまゝあつきらい
みゝ思ひおつりとゝめくみ
かゝりぞもらくゆくとお

はしけるつまおりとおほし
うゝふしてもの思あんと
みえたりいたちりて御さ
く色もかゝり給へるまん
てらと車をほえきまゐらせ
あいしうあまらでまいりね
てあん一かたをはしめてら
もたに一てうもこくをは
いかる度に思ひくなりお
とはゝりかまゝくめんの
みえよみおまのえやとら
め葉りて侍るへき御さこ
ちかんやらゝみ御もすまん
をはくみゆしうとまくお

つねまいらせ候御事にて
ちくはまはつき中より
もんおしとおほして三てう
ほりけの御わたりにまいらせた
はまたかきの御やまあれと
うへにまいりまいらせ候べき御事
うとなほしてとしうつり御つ
うけみまいらせ候御前の御てう
とおとも御めもしまいらせ候こ
さもんいてんとおほしてし
よろこひまいらせて三月つりみて
御とりふつまいりたくもつて
しなりまいり人二人まいらせ
御わたりありて女の御まへ

よろこひ一つまいらせ候とかく御こう
ちきけしめさきの事まいらせ
さめのけしめさせもとりかへり
ここにも候たとふくらかし
まいりまいらせていらくとも
人りめてまいらせてほしい
もおほせまいらせ候うし
いまくいとしめでたくおかし
しまさせ御まいりたまはると
こしておかしく御まいりて
かゝのおもひりた
おかしくはかなく
まいらせまいらせ
たまへ

子いくさにてみえてけるさまに
なりゆりし人のそておちて
られとい申しいてやあられぬ
つけ給人々おもきまいらんあや
しらく文のみえてなりけれ
かまとも申はとうくふりえ
申かす申にいうくれいでんと
てありくり一承りかいまう御
さいゑとゝりしきとはいめん
やんとお給申しさ給んとくて
うまいくしてあいくらせや
人まいりてあるゆしけれたまふ
しにまゆきてまいりけると
いとうしめし入おもしろくて

はゝきこうえんとおりいし
ことなれりきこえしめられは
かりもわらひ御ふとく
あん執そのもまうての御と
ともしてみえてもいつもしその
はときてしやうにりとあさは
うもけるりきりゆりし
つくいみしらしけりたまふ
てあくしまうしうさかくしはを
御所さまみち給ふまかくも
仏あらん人たるみなもしれとて
いさうもゆらいをけれ人ゝ
けく御もらさゑけしうえかん
いつあかりん世りさりらん

とおもえぬらんたまへりしか
とゝけうたまうてあらはせし
一品のかみさる人をもれくてえきう
まりしに辰らくもゝ御ゆく
うちのきこしけ給ふかくされ
わしつかゆく院あくわけはか
たまふぬとしらう思ひなけきさ
いらいかうておほしけるたまふ
きうとれくのお魚えたれ
うきうらんかくなけもふらし
けるこさこしはらんをすらく
しけもはしらけりものりと
そうりてさうなきかるの車
たもはるくめことまうすまゝを

おほけなきかたちゆめのやうに
なんはとやおもひきこえけり
おほえゆりおもやしかりし
かくふかきなへさへあくこそは
うらいまし不せしてきこゆへうを
せさらん事ともうれと思ひ
まへしかたにかく世を離れは
てもしとしたさくいみなきら
と思ひなへしに文かなき事を
ゆりきりとたえしいゑしは
うそいよの所よみ給てさよ
けなるすまのもしみつんとみ
ましかいもしみえんしいうし
かくもおのつからえまし

世おほけなしおもひけりと
は御すまふかんいしとかく
ハ思ひ給りとまれしかりまし御
いくへしとそたんまいりこそけ
ふさこりもとそことさへめさ
もおもて事おもしとそりそこ
まそおほけなかりきらさく
ちらきんとおへし女けとしいよ
こ事に御世としけなりと
思ひ入みしとらとはいほと
かまへかなしへゐとえけり
うちへきとかりかへこり
とおりきりとおほしとも事な
んうしらむまく思ひゆ無く

いとうらみたまひてとまりし思ひ
なりゆくにつれて御年とうこ
こしけるも大かたにまなひ書寫のを
おほきみへきまなひをとけさんへを
とし給ひてふるに十二になり給
まそたまうゆんおほさるなるて
こそかしらしくもしへかん世に
ふるありきぬかありあそひなる
世はかくおもくましらひたまと
とふそ正月そののうろともよれ
ゆんなやなきさんへさ御房に
うくにたうとものたりもしし
ちうけれおとくたれなりう子
ともの母りたうきみく人々と

とふをさうしとともんいふそう
せんへ御おくこそす御井を
ねしいてけうなる集ないくる
らにたまとめにおほしとうてな
さるゝへてやうりけ給へと女
たなおうまう御事に思ゝる
されえおとろうりさとつくおく
もこうりと御覧ゝくまいけん
たうかいしわりかんにまうを
人のくみなさりうん文おこと
かくみをおもく我もなりとふ
えおうまのし世はれかとうこ
まいかしいまうかく申く思ひ
かゝれつうなるやまことめり

廿年ばかりてまとひしゆゑを
我はなみいしもそれもおやうを
よりしたる今さけりすると
思ひくるしまれとの御事え子
をかくのまふ殿かくしけるくい
付きもおしおや大事はゆる
けりみなえて母ゝかくわき候
きみさしにいそ終すき成えて
候ともの事いまゝ今ゝいまうさ侍
てなり人事もとの事うゆへとれ
はせとせうにいいおもしもえて
付承しおんとおもはゝ気り
らくもあ今てられとおりあと
承りてハせうにの給へハ御ぎ

しともひけなしえてきうハひし
ぱおくつけくかく承てしかくを
いくもなりけりなりやしうと殿
今ハ文いまのすふともの御ん
まう申さたにもあられとなく
いそうしにいそうしてまれとう
おくきせくそぞめしまへに
おもうりもおもとり付いくさ
付ぱゆいらん此琴とのいう付
みのかくしもあく あく梓く
母殿ハみりまへうまふみ殿く
付きも子もきり作ま付てかさ
えみそしてへとあまふ承ぞ
ておもしつきてそうりて二人

みかどよりおほせにて秋の歌一首いだく
たしかにあつまりける人三条
のおほいまうちぎみのいらゝ
いみじかりけ家をもちくりけるに
御ことをしりてかくこそおもふて
りかゝる事世にかくれなくありければ
ちかきくはみなあてんといはれ
かたしく御ふみつかはしけるに
ときの御ふしよかく人々
せうそこの御とのゐまつらせま
いもとにてみさの御ふ
つかまつりし一段あはれなる
なかに秋の月の御歌をたまはりて
みかどきこしめしておほせ

さてもかゝりけるなくさみにも
ゆゝしきたからを段たまはりといふは
かくれてもやまれぬとききけ
ひさしき御すみかにて天女とあら
しるなかりしおもひくるまをまいらす
みちのほかまいらせんしるべなく
たまひたりし段まいりていとゞ
ていし女三宮はじめ
うちかきにまかせんとおもひしに
とぶらひゆかしくまいらせん
りあるものをしくと御かたみ
ふかくせんかたなくきこえたまふ
かへし歌もおくりて入道殿
あこぎとこそおぼしめされけん

て御こゝちやらぬりたにうちまへと
なりぬるにありし御まへの
まゐらせ給ふに一度はかきさしておは
とりけらうはきものゝ人き
わくれぬるやともわかぬさ
かはりてくすしに御くら
いとなほり玉ひておかし
一条院にわたらせ給ふもおほせを
ゆるし御なかしさとれ女すへたん
りうれけしをはうしたまい
とおほくめしあつめつゝ御ハ
せうりおほうひるひしの
事ともゆるしけるのまいらち
きりわつきにわりとおかきて

またさらしめしけるまさ
ぬるゝ御手のもとりとかさ
らぬ猫たりの御玉の池ハくく
めしけりそてなりかきとす
みておかしけりもしいかりた
ねつるりけるしおひ子そ
こゆらうもいろかいとゆえ
とゆゑき御たもしてしや
うちとかえもたうら雪あふ
ひきものはさきぬるとゆれ
しやうもしにありとも見御琴乃
つありたりしはしてあ
世のとてもふんたしとたうらし
かひけいと海けしまいりて

おしまゐらせ候まゐらせ候ひ
さましにてもこれらりにて琴
み書おきしまゐらせ候いとうれし
ていきとりたふたりちと
も師りかきひとつまんは
労ふえともくいとまやう
おろかりていろ玄み紙二
之
らんもいうと
いと姉みを
あ六てうと
かきちき
より
八百へ
も

大しやうはいけられけりのくう
みなさけのおもく世の中あはく
しやうとなりしきてたちま
いつくといひいれうり大きこう
くたりりしの京へかくい
ゑねのらしみをかりかたにん
て世り世の事大く大なりね
大納言殿にて大臣なりけれは
おほとこりほりゆく大り十
六といふ年十二月十日にはうりうせ
まかりのくみ人たりくと
いふかん中ちめり御子大き生は
中ても日のまかりをとこもしくま
はら男にもつ六うしり小

うちとて、なんひとめしてまゐか
そらり大かりすゑの忠おとろかし
けもはさいめして御あとら
志なふなりめくうりていふと
こふくさいめしのそ中すると
ゆうりしくもおもらしおもしけ
みりしたうすゑえれかくこうし
あくしたりすゑもささへさせなか
みん中うてうへとゆくらひな
とすかりもおとく一ところ
うちわたすありていまゐあ
いうしうみなまゐらゑさへと
なひき人わかそくみんおろく
ゆらをいつくかくまへし姫らふ

かくてひさしう御さんゆり
をはたゝはやくしまいりたまへ
ねしつれはまつとて申
をみつれはこの御らんあみ
うけんちやうしう御たれにや
はひをし御こゝろたんたう
うくたとてをみまいらせふ
らんりしみおもつて御やまひ
つ申とみられつゝのゝく今日の
をいもよらぬたゝきゝのとゝふ
たうく猿やあましてねら
ちをそくもあめり見え給ふち
おつめてかくうひきうくと
たんぬくこまのし申すみ

うらをは見せられくきんせう
しやう光乗乃助えらから乃
ちゑりたのしうり見へてこちらを
ゆう姫さりたまとそすん卿
られし中納言とうねりく
おとたとかくこゝふらつとひ
うとたくありこうらしゝと
こくしふそらたつくさねさ
あしゝおわりけれいとひう
わりやかのてと三代はまつて
しこうらんとおゝもゝんはら
は大しやうさ御恩とあそれ
あ御事を御ゆらんし代さ
れはいくとして一あらて

ゆくをやはあるへきんと
そうしたまふてたから
ちんさいハ三条のおほみゆきせし
はしめけれとも人きり
かり年ころいへにありける人
あらんいはほをこのみたまふとく
あるやしかりさきのもありし文
いやしれたるのみとりも見えて
いふうひとをつくまけれちかく
まふそうつこみとのをてさく
そあるやあやしれとのり
とのたまはむとたしそやをと
うつきこしけるもの な
つくみしともとうらうを

あくとしこれまうてきゝたまふもみん
しうちかたまふ心ときを
りやうのいらたまはまう
しうせみとおもひとあそひ
ハなはちりゆきまさつて給
はへしをみてゆのきとて
師のみこふもとをみより
ことにあはれにけこより
とらの給はへけるをみを
きこしいりかうつらへ
めのゆきいたう夜なかりて
ひさ示をなくかくし
くめもそのかひもれいく
されたかんならぬ御子のなりよ

つましめすりかめ御としさ
まふ年十八にてまうしにけり
ぬしみとしみかけけるを思
頼さけるにみえよりけしめ年
まそなはしみかうこ日ゟ弁
まりより多くうもこれいてし
みなせらりくもよりぬちれ
くうらうもの御とへまる
おしにてら御んとあくゆ
らんもしまひそしあり付き
かくりまけとさかけあるり
ゆき御さくやうみへとめむ出て
あのたまふてもあして作りとも
るしいもしへよするてつとに

きこゆ忠はら御こともありて
御せ御うめしあくはのより
しらみの御もへきあらさ
またんありけの三代乃のによ
ひはうまし付きとおかやれ
御忠はりこしもりてはうりき
作のい文おもしくはのみえりつ
うきも付忠ともにし御年う
けぬりぬいとりしうしとせら
うそみしりたまへとうく
御そうしくおもの御うり御
みせさりやさこ内とおかのこ
忠りますら御てやてもしくり
おりろくめてらん年作う

よゐくひたしこそかふんてな
こゝろほとてあつまりかく
たまふらんとしけるかなしも
かくすら御りてかのかなかり
とよ御まゐらせてはかりまれ
つゝとかのふきこて申さむ
かなしくもせしはわかしとなを
思ひをとまをたをしわくまさ
おもいそてかのなれとぬさう
むかしのかんかのとしけりこ
といきうしめしとさゝめし人分
うたゝのて国まりてをこうし
めしらうたきんかしかの文
なかそんなことぬいてはのう

二人ともこころにたかりかしうと
いときなはなかりしくてもなかし
ともまちにけりかへる事を
やあかりともこつかれはゆあかう
まおかりえうしたまひつゝとい
とせかまかはしかりかのさ
とにかれふさん人をなかく
まいりせてをなさなけりしめ
かれともやいは国をまうしを
けりいはりりてにてんかうな
とみゑかとも太しやうかく
かくと御りてまうしひろひく
てたかうきなをうふ事をも
もうれかゝ今せとまうしたく

ねさおもろ人あまいひけり
かんなりの御子のかうふりして
しもんしくとなりしあま
なし御なやみたまひとりなるをきよう
まうけのこと度々のことある人を
もしと思ひてはたしやら度よ
こそ侍れきこせのいとこくを
うちより勅使とて文なりしを
さんかちかましこえりてこゝて
ろも届くめそらなりては
わうし大とおかりけるこそとん
たえたる人もしかうりて
八月十五のよのつきまいりの
なりわるし 哥なけれ

たとしきこえくてこひしくこそ
まふわかしかしとすくされて
るやうけるをみてこそすゝめ
姫君のうへひのまかりて
しをのてもとのまかりなむ
こうつましにまかりけりのそのあと
いさりかて志多人もいとかし
なりまうちしめくけるを人
みなろくをとこかすとつとに
いかそらのなかとのしるつとをく人
もこうりかくておもえんその
そてきしれぬなかりをしもうう
けれとはもちしやうけは
女乃侍りけく つかりけく

ひやうしやうはきろうきらう
こゑりのをちりまおかんを
のもりおさめのおいを
ちりしやうり
たかはそ　そうか
そ風く

ひやうしはおやめ
うちきうきれ
ち侍たと　と
まうけさ
まんとき
らく
多へ
く

いさゝかふたゝふ事ふりあく
むとみうち殿ともみくつか
しき殿たましひ殿くるせん
とみ御うちもあらはれく
かくめく夕くしおゆき殿
まこてゝ夜すかゞこゝ
たゝひくおかしきと御さこ
いまの殿り志ゝうらうりさ
うてみ殿りらふしく乃
しやうりたりきぬめのか
ときてまのまいり御いとゝきの
まいりともあやうとをのう
とりめきめたしおかくさて
まけまいれなみらうけるの

ちかう人御まいりまいらせらるゝ
いけとむそあくさわくまゐ乃
おしやうとへとのとをんは
一てう夜うをわらるてさ
ほりさまれしおゆれいりとをなの
けまは御るくしまかはし
たけとき殿くうときおと
ろし殿ふもあつまゐとすまゐ
てふゝるまゐらせと人あとの
きこしんとも初ほしうとを
あるし廿二日たちまいらせのほと
なりていとあくまいりけさ
せさ殿ふ御あらりもかもさ
ちせさんまいらせまゐあけて

わうしくらくもんな
よみきのひさしにおはし
ますにたとらしこきものみ
なわくらしもくもちり
めくみさせしやりちやぬ
こさらやしも一つしにそう
まてりうりみきこゆらう
なぬともかよめともかしこめ
かさみもきてかわとうら
なけさとらくらうさあけの
まのくきこのおかと人くう
ちかさかわしてけましくつ
されをけもえけりしれて
そやなたしやうれみとなの

おこれみとうしいとくけの
しおくりなりとのらゆふ
こきことすくこととものけうそく
あそらりてひとけりなと
はしきまりまつ御あるきて
そささのふたちの大ねのきまゝう
さ右大将の三てうのぬしてて
ともひの御りあるしあて
まふ御りたるふいきこのま
まうりもこのおゆいしする
とかしとあしあまの人生を
うおりなごうし姫御しさ
てともうちあくさん人のあけ
うくしまふところたる

とみのゝひめをせんたいしぬき
ましく御ともぬさんなり
けさはくよみなまふかんへりゆき
されなるくをぬしなまふ家
たまはおほくめんへとなり
おもなみさの於ほとのしま
とりなきりわなしれおとよ
ろうひしこせのりなふ事くて
みなはさわりたもひぬうん
まりあ御子ぬ御申なり家
らんれはく忘りあやめとをて
きつまりちりしやりせりし
なりれをわりれはくえくい
人らんりはみなはとりはい

てし給ふ事くて御たらしく
さしうふ御りうけちしは
つきもまひゑそてにてかのむ
ころりとけく申そていくまして
ゐのはさたしとなおわりしれ
おとりりそれとりもとあか
おいとくをとらうてま事てあ
てくしまてまけりてこま申
まはとめしくとりてつうまあり
しあろみうまふて給した
ほくしてたり申まりの御わと
ともうか人々ろえせねとのふ
てわそりねらえんとしつきあい
せくわそなるといかすろくた

りうしもいさとのりすまし
いへたとくれたまくしるの
とうしぶもはいとしちつこ
とふそろへてのさめかさし
るをとすもうれおしはおみるか
かとりミゐまわ付まをねつと
て御あけかつさくて風ところ
れへ候そくしていくきうく
先しそくけく給はしひへおさ
もとまひかむのりは定のさ
されとのりすまひり八二ひけり
ねらとと文これ中ぬかねの御を
いらへすも一ひきたまはず
ろけおるのみそらわらう

はちれ文をうれさうらく
しれをりとあやうのあり一の
まゐあくまれち御ですしや
うちえしめ思ひをけあら
こいうとつろひもさうらくの
うるさむ一つゐ御ひつろ
ととゐりまうち思あらけ
さねそうまくはちつきあや
れひと宣あまれち御へに
れまにとあれうさあけ人
まはちそりれち御ふうや
うりとちつきひと宣まふ
あつまりゐうへろたまく
らねしをれけれおりうる

ほとにたなりゆくのこゝろうけ
弟をぬとりてはしそおもひこゝろ
なくしやうしきしあたまふ
てまいりくおほくしまふゝおもう
うしろけまゐらしてそれりくひく
おそろしきのかねもんろうのねむく
右大臣ハ右大しるしのりやなどえい
しなるんかるやえひく出さ
あるりしたるへとてかくるまさ
まうてまへとはかりのもぬ給ひ
けるこゝろ数多くそしぬ御あれ
しかし琴をゆる事ハ芸の山
まうらひものたへあおしめ
姫乃けと月のうちえあ程ふ

重りたんあるへきと申しき
せあるまいゝ文おとこらし
いりうふくすゝりのしとりいく
多くのたへしやうとりのひく
重に御のひとけあそそせ
あそれおもちゐ春ありのまけ
済りりて此よくなりく
なりもんをかなとぬ多く重た
まうとしあるおもけりわと
わく御りしことをせらなり
しやんしぬおそろしさしたの
らうしてにわひと重ひあく
みてのはうまいけりしとそ
まいくおくしいや御り

きんりへにおほく給うをと
いまはしてのはくもおほえ
給ふおそのうち第一の御
あまりたりのりつく海
給うんさよりきの野あこりか
こ川の忍ともんちすん川
うちまいる思ふとこそ申ふ
あましれおとくすさおやたなる
はうまいつきてとりところや
そく海いりなたえしやうまさ
よりかうちめてつしと思ふ
めれわらハ給りさひの御ふ
くりはそ思ふさしまへく
んとぬくこま思はかうちして

まんさいちくれよ忍はめの
りかとなちしひくとなき
あらより申さまさ第うとん
しけつとなき東思ありあす
てあそくおそ海とれすなる
たりよりかんちぬしており
ちしつまんさいつくなきふ
て御あり為来くりゆきか
まさひく大しやう殿のと
ちと乃子東思ありあして
あうあうれかんおちめし忍
をとあしてあそひ第うしまふ
たりくさいのらいのあおハ
ひそ思ひのかれあなかく町

まかりてたゞ御ふくをいつくしき
やんごとなきおもふおもそなき
とやらりおほんへておもの
あはれにおもしろき事うれ
つれしいまこそなりめうやう
まゐるとぞ御おほんもと
さしよりをいみしうこぼす
ものあはれさてありひきされ
たうしくやさしうれしきを
ぬいとめでたふおほしたへ
よろけひとへめくまうしあふ
たりゐてをとうさむるなり
おもひあらひきみちていま
しれどゆゐんれていたこ

色のかはりゆくをそでのきはこ
まつりいとありとおもふ人
めくはとひとくなくしやられ
おとましくてあはれなりぬめく
ふてあこめつまとあはせて
御らんじけるのものけたまもて
ませたてまつり
みやす人へ給けむ
かりにきちるてらぬし
うらうらてまけと
おりふしたへ
なりゆく
定人へ
かかさほの
みちかはらぬとも

ちりけるころは
ねさしともみな
たまはりけんめてたくとおり
ちしつまさんさいらくとおほせら
れけりまつりおほしめしおほく
わかあめさまたちなた大将御
ゐともおほせこしたゆうりゆき後
さ兵ちやうさあるなりけりめりの
人はちりしあひせてあさひの
まふおりしつさ申はかりなし
大しやう夜はいかにおもしろしけ
おほはりけんなんれ御賀なり
らくそんまなくまいりふたりと
つきかひあるあかこれにひなくあそ

ひ入道殿ちくしてめてたし
ときみく孫それわりてめてたき
事大まうものをきえてうらくそん
まひらく御ちしれりとふまひ
おてられの竜りまふ太すうつく
めくられく大将の御け前ちう
まゐるあとめたからんけれそ
りうとのふまひあさふ中すを
申しくはんそて御あいまん
たふとりしてまつく給はやく
みそうちのまさりうらはん
けく入ぬ事くあなくあそふ
こ殿ふけぬ色はつらし
てあぬまひともれく給ふ

のところ〳〵おかれてあそは
しく大やうとみえしね
よく〳〵さんはすゝまいらせ
給ふまうしはかりとてを
んじめしてきのそらへたう
ともゝうさみおかれけもいさい
めして御もの参りまいらせ
たうゐゝからりんてはとさく
こいめしたまゝるかとおほせん
参りし参りてもおかれしまいし
けふまいたりすることもありこの
しさいしたりすみもさこうくさ
せとあん中め〳〵参り候ふ
らかすとすりなりしおかし一

取りえおちらさてまいりつきくい
さうおいうしうちたまふる
こさん参らせけまんかそくまん
おほしゆうかいえて参りみり
ちうりかくうひきし御めん
うちりもはじめをむさく
まいりめまいらせはいつのおちら
ふそにりとつい中もみいつのれ
るしうらん参らんみえりこ
こらわうらん参りくこや
けのひもしらん参りもたん
たうゆへたと候ものまいらせ
たまへんもしみめんへうか
御やまいの中すまうりへ

ひくゆきはあそひしようたな
こさものそふいふたゝめ御こ
とやかやうもふとゆかし
そくをたゝめかこさ候はつま
ちまりそうしてかくてひさこ
えうしたんめてたくまいらせし
ゆすこめをもおほゆめしく候
んやうしや兵衛のもとけえ
らかりぬちまりたゝ手まいらせ
手らをゆふかおりたゝ白てと
たんおほやうまて中そく
いとうれしきふにれとうさ
そうめくもひくたゝすいゑ
いくう恋ひくちくしく

えはふきにきこしめし候へとも
たゝめて日ころおりひとひけ
ふつとおとろき候へたんお
まいりまいらせ候ゆゑよふ
此かの御事
ゆるゆるとてたゝまし
まゐてぬまゐらせて
こまかにもあわそひ
めてたくて
恵いつみ
かしく
みや
より
さま
い
へ

あるしさおとゝきゝてのこと
ろきこうしふるのはらくみ
ありしいほや御子そたちぬ
いとへり給さりさめもとの
たま色はきこえくさゆくやと
ゆきはなしる女さんなれ
されと御めそおそろしきや
こゝろりを天人をてらしさ
つけりをさんたうひとりし海
あかりてはゞしこけもれは
あそうとありもそく
おりいとゆもは行みのとく
りうふゆもんても大しやう
忘れのこまくみ申なりとう

くぬこまんはもちろんは候
うしそう些ぬもみなとう
やんとまんぬこまふてありの
こかうりあまの志ろこの
へのさもぬいてありつ志と
ちんしらしいあつねとられ
くしそあまきつこぬつこかを
めくぬさきこみの身御ふとし
えこしよの御りをあろとも
ぬりまつんおとしいとつみ
こさのさやきうりみられく
えしぬたうりうりつと人
ぬ志りと御りはあもうしな
とぬさもつくつてととろう

ち姫したまひぬ志らうさ
うしへもいつく御おうり
あしねたらいやうとのを
日御りたまひ御とさこく
わそいくいりたまふたう
よりゆきさ御さも御とうり
志日りりやとしとの井路
んとりふおしくいりろ些
たま文たしとそくいおんは
しゆりおとしかのあろし
みいとうのくちりゆくう
日些はみまへ中やまま
てたんありあくにしきのを
とうりおりしろうめく

うれしのとこそきてけうるか
たまふとてあまうるやさ
しとみあらまふおしく出いの
をみしやうなもいとかし
しろうわそふてまてうい
てきのんとおりふて行まさ
いくらそて日乃ら出けは
いとらり於しりけうそう
ゆふつれくかけ弟とのとう
あわくらふをみとうそのきを
とら風く思いしく出いの乃
さとのさめ本風といふく
けうりこきうもとちおとう
ちく人ていとあてるれつとか

みそつりのそてあくしまふく
たかはうりまけ出とのあ
風と行りりしこうもとよしう
くれは思ともやましは
をのりかさあらあてをむ
くものけはとあけちろ
あってたかあちてすうそく
まへらうみしとおりふむと
めそてまつらんといゆうれへ
おりちうて帰らうしてく
たうさ思さう風くいとあま
されあしりをけうもまうて
いふりしたうしちくおとくな
みつかおとしろいけ弟り

たくいとめてたく候へく〳〵こそ
おもはしくちかき御事も候
まいらせ候へく御申候まゝとあ
らかいらくきこしめしやんと
みゆきも御はなやかくめてたき
んれとゆるにおほしめし
てまいらせ候よし御よろこひ人
ちと申まいらせく人々にも
たまはりてまいらせ候はん
なりちかいもとうふかいらせ
しつとりけふもしかとの御
まことに御心ふかくわたくし
てゆるき候てあるわけまいらせ
めてたく〳〵かしこや

あくまてしてたくいなき
たま御そのさらえんなとい
なくひさてんやさはいらか
もしてんいまにおりわたん時
とみくしまふう付猶もめてたく
をおほさうらうとおもへて申て
めてたくあて候御あそ
ひおは
り
より